第112回日本精神神経学会学術総会

教育講演

現代における宗教と精神医学
――救済と治療――

大宮司　信（北翔大学教育文化学部）

この論文で著者は，精神医学の立場から宗教を研究するという視点ではなく，宗教あるいは宗教学から精神医学をみるという視点から宗教の1つの治療性について議論した．精神医学は心の病気からの回復を提供するが，一方，例えば大震災の後における臨床宗教師の活動，ターミナルケア，自殺予防のように，宗教はよりひろい癒しを提供する．さらに宗教は文化的に共有される癒しを人々に与える．著者はその1つの例としてドイツの小さな村に170年ほど前に起こった悪魔憑きの出来事を挙げた．この出来事はまず村の人々の癒しや信仰の覚醒を与え，やがて広くキリスト教世界の中で共有されるようになり，最終的にはドイツの思想界の潮流に影響を与えた．著者はこの出来事は精神医学よりもひろい癒しを宗教はもたらすことを示すと考える．医学がそうであるように，精神医学は人々に日常的な生活を助ける手段を提供するのに対して，宗教はより深い，人間の生きる意味に対する癒しを提供すると考える．精神医学はこの線にそって癒しの役割を果たすべきと結論する．

＜索引用語：救済，癒し，治療，治し，宗教＞

はじめに

著者は17年前の第95回総会で，今回と同じ演題で教育講演を行った[3]．時代は地下鉄サリン事件をはじめとする一連のオウム真理教事件の衝撃が日本を覆い，宗教がさまざまな問題を社会に投げかけた時期であった．当時議論されたのは，こうした宗教の呈する現象の中に精神医学的な側面が存在していないか，あるいはそうした視点から説明できないかという点であった．この状況の中での講演は，当然宗教の病理面が中心とならざるをえなかった．同じタイトルの論述を今日行う場合，何を対象として取り上げるべきであろうか．著者は17年前とは逆の宗教の治療的な面を取り上げる必要を感じている．

精神の病いの非常性と宗教の心性の超常性，精神科臨床における治療と宗教における救済といった視点から，精神科医療と宗教，あるいは精神医学と宗教学という2つの領域はしばしば関連づけられたり，対比されたりして考察の対象となる．そうとすれば両者が精神の治療や救済についてどのような志向をもち，理論や実践を構築していくかを振り返ることは意味あることに違いない．

また，著者は長いあいだ，精神医学の視点から宗教をみていく方向の研究をすすめてきたが[2]，

第112回日本精神神経学会学術総会＝会期：2016年6月2〜4日，会場＝幕張メッセ，アパホテル＆リゾート東京ベイ幕張
総会基本テーマ：まっすぐ・こころに届く・精神医学
教育講演：現代における宗教と精神医学――救済と治療――　座長：豊嶋　良一（フリーランス精神科医/埼玉医科大学名誉教授）

表1　救済と治療

	救済	治療
対象	病気に限定しない	病気に限定
受益者	信徒	一般
方法	私秘	公開
対価	不定	一定
発現	不定	一定

最近では宗教あるいは宗教学の立場から精神医学をみる，あるいは見つめ直す作業，とくに宗教と精神科臨床が，上述したように，ともに治療・癒しを志向する立場と期待されることに視点をおいて研究をすすめている．本論考ではこうした立場から，精神科医療における治療と宗教における救済の関係について考えたい．

Ⅰ．宗教とその癒し

こうした論考では，ただちに宗教とは何か・どんなことを指すか，という問題がもちあがる．古い記述だが，1961年に当時の文部省が刊行した「宗教の定義をめぐる諸問題」には104の宗教の定義が挙げられている[10]．この事情は，統一した共通する宗教の定義は「ない」，あるいは「設定不能」であったことを示すといえよう．

事情は現在も基本的に同じである．宗教を学問・研究の対象とする領域は宗教学であるが，日本におけるその中心的な学会である日本宗教学会では認定した統一的な定義はない．日本の代表的な宗教学の事典のうち，以前出版されていた「宗教学事典」[11]，あるいは比較的新しい「宗教学事典」[7]にも統一的な定義はないが，宗教をどのような視点で，また何を明らかにしたいかを踏まえた，いくつかの「定義することへの視点」は記述している．

つまり，ある目的（例えば著者の場合の「精神医学と宗教の関係を考える」といった）をもって研究する場合の，仮設的な（「仮説的な」ではない）定義設定である．このような前提はあるが，著者はいわゆる「宗教心」を本論考では宗教の意味内容と考えていく（著者の宗教についてのより詳細な仮設的定義づけに関しては拙論[6]参照）

宗教と医療（本論考においては精神科医療）が，もとは1つの根から出発して枝分かれしたという考え方はわれわれにとってはなじみ深い．その一方は宗教として発展し，他方は医療として発展した．そして宗教が救済をめざすとすれば，医療は治療をめざす．

もちろん救済と治療は異なる（表1）．宗教の論理はそれを信ずる者だけにしかわからない部分がある点で私秘的であるし，救いに対する対価は時に応じ，救われた者の立場や状況によって変わる．一方，医療の論理は公共的かつ公開的でなければならない．すなわちある個人に効果があったものが別な個人に効果がないといったことでは治療手段とみなすことはできない．また恣意的・個別的ではなく，一般的に（少なくとも専門家の中では）共通の言葉で語られる内容でなければならない．

Ⅱ．宗教の示す癒しとそのひろがり

1．宗教の示す癒し――メットリンゲンの悪魔憑き――

（本項の記述にあたっては井上の著作[8]に多くを負っている．また事件のより詳細な経過と著者の見解については拙論[5]参照．）

精神の病いの治癒がそれだけにとどまらず，さらに人々に共有されるものとなる消息について，今から170年ほど前にドイツの一寒村メットリン

ゲンで起こった悪魔憑き事件を挙げ考えたい．この事件に対応したメットリンゲン教会の牧師ヨハン・クリストフ・ブルームハルト（以下，ブルームハルト）は一連の出来事を「戦い（Kampf）」と呼んでおり，ここでもその表現を使うこととしたい．

メットリンゲンというドイツの村に，ゴットリービン・ディトゥスという名の娘がいた．牧師ブルームハルトがメットリンゲン教会に着任した2年後の1840年，ゴットリービン達はメットリンゲン教会の近くに移住したが，その後ガタガタ，ズルズルといった音が家の中で聞こえだし，一緒に生活していた同胞達も不安で不気味な思いをするようになった．

やがてゴットリービンはけいれんを起こすようになり，家の中に「悪霊が出現するようになった」という．1842年4月にゴットリービンの家に宿泊した知人がそこで起きた異常をブルームハルトに伝え，以後ブルームハルトはゴットリービンへの対応に追われることになる．家の中の激しい物音やゴットリービンのけいれん，やがて「悪魔の声」も出現するようになり，首のやけど，自傷行為，出血などが出現するため，ブルームハルトは熟考・祈り・断食によって，この事態に対応しようとする．

翌1843年になると，ゴットリービンの体から砂やガラス片，古釘などが出現し，また編み棒やピンが出たりもする．こうした激しい悪魔の仕業との対決のなか，ゴットリービン達は一度は転居するが，転居先でもなお同じことが起こる．

1843年12月になると，悪魔は兄のハンス・ユルクと姉のカタリーナにも出現するようになる．しかしクリスマスの日になって，カタリーナが狂乱しているあいだの夜中頃，「イエスは勝利者だ」という言葉がカタリーナの口から発せられ，これを境に同胞，そしてゴットリービンの悪魔憑きは次第に消退していった．

辺鄙な片田舎で起こったこの事件は周囲の村々や多くの人々に喧伝され，役所も黙視することができないような騒ぎになり，事件が収まった翌年の1844年，ブルームハルトは当局に「メットリンゲンにおけるゴットリービン・ディトゥスの病歴」という報告書を提出，これが彼の選集[1)]にも登載され，事件は現在にまで伝えられることになった．

周囲の村々からは，事件を伝え聞いた人々が病気の癒しを求めブルームハルトのもとに集まるようになる．ゴットリービン自身は事件の後，ブルームハルト家の手伝いとして働いたが，39歳で結婚，3人の子どもにも恵まれ，1872年に56歳で平穏なうちに生涯を閉じたという．

「戦い」はメットリンゲンにとどまらず，やがて二千年余のむかしイエスが行った悪霊憑きの癒しと直結して人々にうけとめられるようになる．つまりゴットリービンに起こった癒しが，イエスの癒しの再現と見なされるようになる．

しかしブルームハルトも，また後年この事件について発言した精神科医のシュルテ[12)]もともにそろって述べるのは，事件の特異性や奇跡ではなく，その意味である．3年10ヵ月にわたるブルームハルトとゴットリービンの共同の戦いは，一方では悪魔憑き（著者の言葉でいえば憑依状態）からの離脱という治癒をもたらしたが，他方，彼らの眼からみれば，ゴットリービンの健康回復にとどまらぬ悪魔の敗北と退散という宗教的意味をもたらした．先に述べたようにゴットリービンのその後の人生をみれば，事件の解決が単なる健康の回復だけではない新しい生き方と生活，すなわち治療を超える癒しをもたらしたとみてよいであろう．そして「戦い」はさらに当時のキリスト教世界へと波及する．

2．癒しのひろがり

ブルームハルトはこの出来事を通して，いわゆる教会の信仰復興や信徒の増加といった目に見えること以上に，あるいはそれはどうでもよく，現実世界に働く神の顕現という，より深い思想へと導かれていく．この思想は敬虔主義と自由主義という当時の2つの神学思想を超え，神の力のこの世における顕現を希求する「神の国」思想[9)]へと

結びつき，さらにその後の神学・思想界へも影響を与えていく．

別に論述[5]したので詳細は省略するが，この潮流のうち，カール・バルトによる弁証法神学についてだけふれておく．18世紀から19世紀にかけて，キリスト教は合理主義・道徳主義へと大きく転換していったが，その流れは20世紀の初頭に再び大転換する．この転換を遂行した中心的な人物の一人がカール・バルトだが，そのバルトに強烈なインパクトを与えたのがブルームハルトである．彼の神学もだが，ドイツ教会闘争と呼ばれるナチスとの熾烈な戦いに，メットリンゲンでの「戦い」に発するブルームハルトの思想が合流している．

ここで述べたのは，一人の悪魔憑きの治癒が，後にキリスト教会，さらには西欧の思想界に一石を投じる原点となったという事例である．個別の治療がやがて医療の中で市民権を得た治療法になっていくように，宗教的な治癒や癒しは，まずは個人に起きるが，それにとどまらず社会に通底する1つの流れを形成し，人々が共有できるようになったとき，はじめて救済の名に値すると著者は考える（「現代における…」というタイトルを掲げながら170年も前の事件を取り上げるのは，こうした歴史的風雪に耐えてはじめて救済という名に値する知が成立すると考えるからである）．

同じような事例はこのエピソードだけではあるまい．人々が誤って流れ込みそうになるような状況に対して，宗教が強い批判とまた力強い引き戻しをはかることはこれまでもいくつもみられる．それを「迷信を信じるものの戯言」「たまたまの偶然」としてかたづけることも不可能ではない．しかし宗教には時として，こうした形の強烈なブレークスルーがあり，その基点に精神の病いとその治癒が存在する場合がある．

Ⅲ．宗教と精神医学の視座

精神科医には憑依状態とその治癒とみえる現象が，宗教の領域では神の奇跡や神の国の到来とみられる，この2つの全く異なる視点はどのように考えたらよいのだろうか．宗教と精神医学の関連を考える，おそらく最初にして最後の問いだろう．メットリンゲンの「戦い」について，神学者との討論に臨んだ精神科医シュルテ[12]は，同様のことを別のたとえで次のように述べている．

「それは，ちょうど物理学で，全体的には理解できぬ光という現象が，波動説の観点からも，量子論の観点からも――それらの理論は相互排除的なものではない――考察されるのと，同様である．」

またかつて北大の精神医学教室を主宰した著者の恩師諏訪望は，宗教と精神医学との関連について，この2つを安易に混在させてはならないとする一方，この2つは，いわばルビンの図形のように，視点によって見えるものが異なるという関係にあるという[13]．

いずれも宗教と精神医学という2つの視点を安易に混在させず，視点の自由な転換によって相互排除をさけようとする．ただしこの「自由な転換」という点については一考を要する．光にしろルビンの図形にしろ，一般には視点の変換が見る者の自由な変換によるのに対して，宗教は，何者かによって，視点の変換をいわば強制的にさせられる秘儀的な体験とでもいえるのではなかろうか．

おわりに
――精神科医の仕事――

精神科医療の治療と宗教の癒しには現実面・実践面でのちがいにも自覚的である必要があろう．ブルームハルトの子（同じくクリストフ・ブルームハルトという名前なので，「子ブルームハルト」と呼ばれる）は父の精神をよく受け継ぎ活動したが，次のような体験をしたという．

「何かのことで絶望に陥った一人の男が，ブルームハルト（ここでは子ブルームハルト：著者）のことを聞いて頼って来た．ブルームハルトの答えで，そのような状態から立ち直ったのであろう．彼はブルームハルトに感謝すると共に，『勘定』をしてくれと頼んで来た．そして，自分の状態は今は良くなったが，またいつか悪くなったらよろしく頼むと書いてあった」．子ブルームハル

トは，そのような経験を話した後で，「私は，泣かざるをえなかった．自分のためというのではなく，救い主のために」と語ったという[8]．

宗教者である子ブルームハルトは泣いたであろう．しかし精神科医の仕事は，この男のようなセンスをも肯定してすすめられるのではないか．皮肉な言い方かもしれないが，医療はこうした人々をも対象に成立していると考える．

一般に病気は人間の危機であるが，同時に生への新しい視座をもたらす契機にもなりうる．こうした病いや癒しのもつ人生の画期ともいえるような特質はまた，宗教の世界へとつながっているように著者には感じられる．しかし精神科医は明日も元気に過ごす健康を作り出す小さな助けの役割を果たすのであって，生きる目的や生き甲斐を提供する存在ではない[4]．ましてやそれを押しつける存在ではまったくないことに自覚的でありたいと著者は考えている．

なお，本論文に関連して開示すべき利益相反はない．

文　献

1）Blumhardt, J.C.：Gesammelte Werke―Schriften, Verkündigung, Briefe, Gerhard Schäfer (hrsg.), Reihe- I , Band-1：Der Kämpf in Möttlingern, Texte. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1979

2）大宮司信：宗教と臨床精神医学―心の「やまい」と心の「いやし」．世界書院，東京，1995

3）大宮司信：現代における宗教と精神医学．精神経誌，102；51-55，1996

4）大宮司信：ゾーエーとしての生と精神医療の一側面．北翔大学生涯学習システム学部研究紀要，13；17-25，2013

5）大宮司信：メットリンゲン―悪魔憑きと「神の国」思想をめぐる病跡学的考察．人間福祉研究，18；11-32，2015

6）大宮司信：治しと癒し―精神科治療と宗教の救済．最新精神医学，21；5-12，2016

7）星野英紀，池上良正ほか編：宗教学事典．丸善出版，東京，2010

8）井上良雄：神の国の証人・ブルームハルト父子．新教出版，東京，1982

9）金井新二：「神の国」思想の現代的展開―社会主義的・実践的キリスト教の根本構造．教文館，東京，1982

10）文部省調査局宗務課：宗教の定義をめぐる諸問題．1961

11）小口偉一，堀　一郎監修：宗教学事典．東京大学出版会，東京，1975

12）Schulte, W.：Was kann der Arzt und Psychiater zu J. Chr. Blumhardt, zu Krankheit und Besessenheit sagen?, in：Evangelishe Theologie, 1949/50, S. 151 ff. Otto Bruder, Zu den Heilungen Blumhardts. in：Ev. Th., 1949/50, S. 478ff. Walter Schulte, Zu den Heilungen J. Chr. Blumhardts. in：Ev. Th., 1950/51, S. 91ff.

13）諏訪　望：急がずに休まずに．シャローム印刷，東京，1992

Religion and Psychiatry in Present day Japan
—Relief and Treatment—

Makoto Daiguji

Hokusho University, School of Education and Culture

In this article, the author has discussed psychiatry from the viewpoint of religion or the religious studies as one kind of healing instead of looking at religion from the viewpoint of psychiatry. Psychiatry gives us recovery from diseases of mind but religion gives us healing across a wider range of activities, for example, the work of a clinical chaplain after a big disaster, terminal care, or prevention of suicide. Futhermore, religion gives us culturally-shared healing. The author uses the episode of exorcism in a small German village 170 years ago as an example. This episode initially gives healing and faith revival only to people in the village, but then this is shared in the western Christian world, and finally influences the stream of thought in the German intellectual world. The author considers this episode a prime example of how religion can affect a wider area of healing than psychiatry. In the same way as medicine, psychiatry gives people a means to help themselves in ordinary life whereas religion gives a deeper healing ; a healing related to the meaning of life. The author concludes that psychiatry should align the roles of healing according to this demarcation.

＜Author's abstract＞

＜**Keywords**：relief, healing, treatment, cure, religion＞